魔法少女リリカルなのは―ある鴉の兄弟の話―

イザナギ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのは―ある鴉の兄弟の話―

【Ｎコード】
Ｎ０１９０Ｙ

【作者名】
イザナギ

【あらすじ】
ある管理外世界で、出会いは突然訪れた。
『存在しない存在』が物語に係わったとき、物語は静かに動きはじめる……。
これは『八咫烏（ヤタガラス）』と呼ばれた、二人の兄弟の話。

ついにやっちゃった……初めましての方は初めまして、イザナギと申します。
連載二つ目作っちゃった……放り投げないように頑張ろう……

この小説は、作者自体があまり原作を見てないので、独自の解釈やストーリーの矛盾などがあるかもしれません。
あと、アニメの内容を確認しながら執筆するので、非常に亀更新になる可能性大です。

至らない点などがありましたら、容赦なく突っ込んでください。感想などもお待ちしてます。

prologue

人生とはどうして、なかなか思い通りにはならないもので

人との出会いも、なかなかに不思議なもの

ある偶然がその人の人生を定め、

人と人との出会いが、いつか語られる『物語（おとぎばなし）』の始まりとなり、

そして『物語(おとぎばなし)』が語られるのは……

……『物語(おとぎばなし)』の中ではなく、その『物語(おとぎばなし)』が終わった時。

人に未来は見通せない。

いつ、誰の話が『物語(おとぎばなし)』として人々の間に語り継がれるのか。

それはまさに、神のみぞ知り得るのかもしれない。

しかし『神さえも知らぬ存在』がその世界に現れた時

その世界はどのような『物語(おとぎばなし)』を語り始めるのだろう

世界が語り始める『物語（おとぎばなし）』

紡がれてゆくのは、誰かの人生（ものがたり）

魔法少女リリカルなのは―ある鴉の兄弟の話―

これから紡がれる『物語（おとぎばなし）』

どんな話になるのかは、神のみぞ知る

ｐｒｏｌｏｇｕｅ（後書き）

どうも、こんにちわ、作者のイザナギです。

書いちゃったよ、リリなの……他の連載どーすんだ……ｏｒｚ

まぁ投げ出さないように頑張ります……

あらすじやキーワードに書いたとおり、原作の方を確認して書いていきますので、かなりの鈍足更新になるかと思います。

皆様のお口に合うものが作れるか……それだけが心配です。

次から本編のはず……『介入物』っぽいですが、原作に準拠していきます。

途中で恋愛描写とかあったりするかもしれないので、『〇〇は俺の嫁！』という方はお気を付けください……。

今後とも、よろしくお願いします。

ではっ！

Is That A Wonder Encounter？ 1

この世界で『東の果ての国』、『極東の国』とも呼ばれ、かつては時の大国に『日出国（ひいずるくに）』と喧嘩を売った国、日本。

彼（か）の国において特徴的なのは、四季がはっきりしており、なおかつそのことに何かしらの感情を持つ感受性らしい。

今は六月。

一日を過ごすごとに増してゆく強い日差しと、独特の湿っぽさが混じり始めた空気を肌に感じて、ようやく季節が移りゆくのを感じる。

この時期に感じるのは……来（きた）る季節、『夏』への期待だろうか。

よくわからん。

そんな季節の移ろいの真っ只中(ただなか)に、その都市も含まれていた。

ここは海鳴市。

海辺に面し、都市化はしているものの、多くに自然を残す平穏な街。
田舎というには物が建ちすぎ、都会というにはいささか物足りない部分もあるような、そんな都市。

治安が悪いわけでもなく、かといって大々的に宣伝しているような観光地を持つわけでもない、一般的な都市といえるだろう。

『平凡な、しかし平和な街』

そんな看板(レッテル)がよく似合うこの街に、闇が降り立つ。

「はぁっ……はぁっ……はぁっ……」

人の目につかないような森の中。
夕焼けにしては濃すぎる赤が空を覆い、木々の葉は不気味にざわめく。

そんな不穏な雰囲気の只中に、少年がいた。
探検隊の隊員が着るような上着に、ももをむき出すほど短い短パン。
腰には道具を入れているのだろうか、ウエストポーチのようなものを付け、マントのような外套（がいとう）を羽織っている。
日本では少し変わった服装だ。

そんな、日本に不釣り合いな姿の少年が、不気味な森の中にいた。

息を乱し、腕を庇い、その手に血を滲ませながら。

「はっ……はっ……はっ……っ！！！」

少年は何かの気配に気づき、目線、そして体を、自身の左手側の茂みへと向ける。

彼が振り向くが早いか、目線の先の茂みから影が頭を出した。
眼は赤く、後ろに触手のようなものまで見える。それは明らかに、この地球で見かけるような生物の姿ではない。
そして血走ったかのごとく真紅に輝く眼は、まっすぐと――――少年へと向けられていた。

「……っ！」

その姿を確認すると、少年は腰元から小さな宝玉のような物を取り出す。
ほんとに小さい。せいぜい飴玉くらいだろうか。
とても武器になるような類の代物には見えないそれを、少年は目の前に突き出した。

不思議な光景が起こりはじめる。
飴玉のような宝玉が、輝きだした。

次には、その輝きだした宝玉を中心に、真円とこの国の言葉ではない文字の羅列が、うすい緑の光によって描き出される。

意味を持つのだろうその光の筋は、正方形も加わってさらに複雑な形へと組み上げられていく。

そう、まるで――――――魔法陣のように。

すべてが組みあがると、その魔法陣は宝玉に近づきながら円の径を縮めていく。

だが自分に対して不利なものだろうと悟ったらしい『影』が、茂みから飛び上がった。少年の用意が整う前に攻撃するつもりらしい。

実際、少年の準備も完了していなかった様子で、顔中に玉のような汗を浮かべながら歯を食いしばる。

少年にとっての幸いは、この影――――怪物とも呼べる異形の者の足が、それほど速くなかったことだろうか。

向かってくる『怪物』に対して、魔法陣を展開しながら少年は言葉を発する。

まるで、向かってくる怪物に聞かせるためのように。

「妙(たえ)なる響き、光となれ！
赦されざる者を、封印の輪に！」

すべてを言わせまいと怪物が飛び上がるが、すでに遅かったようだ。
少年が、最後のフレーズを叫ぶ。

「――――――――――――ジュエルシード、封印っ！！」

少年の叫びとほぼ同時に怪物が魔法陣のど真ん中に突っ込んだ。
衝突の瞬間、怪物も少年も、眩しい光に包まれる。

――――――――――――周りの木々を照らし、小枝や木の葉を吹き揺らした激突は、怪物が跳ね返される、という形で決着がついた。
跳ね返され、地面に打ち据えられた怪物は、体の一部なのだろう肉塊のようなものをボロボロと落しながら、弱々しく必死になりながら這って逃げ出す。
その姿はまさに瀕死の状態。あとは蹴りの一発でも入れれば倒せそ

うな状態だったが

「……にがし……ちゃった……おいかけ……なく……ちゃ……」

少年には、今の状態では蹴りどころか立つことすらままならない様子。

手で体を支え、なんとか前に進もうとするが、言葉を発するごとに体から力が抜けていき、最後の台詞を言い切ると同時に崩れ落ちた。

先ほどまでの戦いで疲労が蓄積していたのか、魔法陣による『封印』という行為がとどめとなったのだろうか。

少年は倒れ伏すと、ピクリとも動けなくなってしまったようだ。

「（クロウはまだ……帰ってこられないはず……僕が……どうにかしなきゃ……でも……）」

少年の思いに反して、体は言うことを聞いてくれないらしい。先ほどから指の一本も動かせない状態に、彼は陥っていた。

「（可能性は……どこまでも低いけど……）」

このままでは自身が衰弱しきって、その『クロウ』という人物が彼を見つける前に彼が天国へ連れて往かれることになるだろう。

それだけはどうしても避けたかった少年は、一縷の望みにかけた最後の『悪あがき』をやってみることにした。

＞＞……誰か……僕の声を聴いて……＜＜

口も開かない疲労の中で、彼は『心』で話し始める。

誰か――――特別な存在である『誰か』の『心』に届くように。

＞＞……力を貸して……＜＜

必死に……ただ必死にその『誰か』に気づいてもらうために、少年は『心』に語り続ける。

＞＞……魔法の……力を……＜＜

しかし最後の力を振り絞ったのだろうか。生命活動は停止していないが、『心』の声さえ発せなくなった。

だが、またしても不思議なことが起った。――――――少年の体が光に包まれていく。

ほんの一瞬だけ少年を覆った光は急激に小さくなり、光に包まれた少年の体が消えた。

今、その場所には一匹の不思議な小動物が、淡い緑の光をまとって横たわっているだけだ。その光もすぐに、うすれていった。

あの少年が持っていた宝玉が、小動物のすぐそばに落ちる。
色こそ不気味な空と同じような紅色だったが、この空と違って輝きを持っていた。

「遅くなってしまったか……？」

街中の電柱の上にたたずむ影。少年のようにマントを羽織ってはいるが、少年の物は濃い茶色だったものに対し、その影が纏(まと)うのは、まさに影のごとき漆黒のマント。
フードを目深にかぶり、マントの前もあわせているので、顔も内に着ている服も分からない。

「ユーノは……大丈夫だろうか？」

不安そうな声音を隠さず漏らした影は、顔をビルの立ち並ぶ街やその傍で共存している森へ向けた。

「……兄さんも来るし、早く合流しないと」

そういって影は、闇に染まり始めた街並に向けて、跳んだ。

マントがはためくその様は、闇に向けて羽ばたいた鴉（カラス）のように見えた。

Is That A Wonder Encounter？ 1（後書

題名の英語は、アニメの直訳です。ウザいですね。合ってるかどうか分かりません；
違ってたり、『こっちの方が良いんじゃない？』みたいなのがあれば、遠慮なくご報告ください。

ちなみにまだ第一話です。アニメに準拠しながら、ところどころにオリジナルの話を挿入する予定です。できるかはわかりません（ヲイ

ところどころに書いてある通り、作者はアニメをほぼ見たことが無いので、それを見ながらになります。
ゆえに鈍足更新です。ご了承ください。

次回は……なのはちゃんが魔法使うとこまで、かな？　そこまでで短く感じたら、次の話を含んだりするかもしれません。

ではっ！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0190y/

魔法少女リリカルなのは―ある鴉の兄弟の話―

2011年10月30日03時22分発行